

様式【学校評価資料】

様式【学校評価資料】			R5年度				山手小学校		
学校経営目標	具体的計画	令和5年度の達成基準	自己評価(中間)			自己評価(最終)			学校関係者評価
			達成状況	評価	改善策	達成状況	評価	改善策	自己評価の適切さ
(心豊かな 心な 児童の 育 成)	①「だれもが行きたくなる学校づくり」の実践や「特別な教科 道徳」の授業を通して、思いやりの心や自己有用感を育成し、安心して学校生活を送れるようにする。	・学校が楽しいという回答が94%以上、相手を思いやった言動がみられるという回答が94%以上である。 (児童・保護者・教職員アンケート) ・友達に優しくされているという回答が92%以上である。 (児童アンケート)	楽しい 児童:90.9% 保護者:91.5% 教職員:100% 思いやる 児童:96.4% 保護者:92.5% 教職員:92.9% やさしい 児童:90.1%	B	・アセスや日頃の様子などから得た一人一人の情報や困難さをもとに見守っていく。また、クラス遊びなどを推奨し、児童相互の関わりの中で集団への帰属感を高めていく。 ・きりりカードの活用を勧め、思いやりのある行動を互いに認め合う機会を増やしていく。	楽しい 児童:90.8% 保護者:92.5% 教職員:100% 思いやる 児童:95.7% 保護者:95.3% 教職員:100% やさしい 児童:91%	B	・日常の学校生活や行事等を通して児童の活発な活動の様子が見られた。一方でストレスを抱えている児童もいるので、情報を大切に、個別に関わっていく必要がある。また、言葉遣いも荒くなっているため、言葉遣いを見直す学級活動等を活用して、学級全体で思いやりの雰囲気を高めていく。 ・きりりカードの活用が盛んになってきた。特に職員からのカードは全体の注目も高く、児童の意識も高まりやすいので、継続していきたい。	基準は概ね達成されており一定の成果があったとして自己評価は妥当である。学校では、一人一人の児童を認め、大切に指導していることがわかる。今後もそういった姿勢を示していただき、保護者と信頼関係を構築しながら児童への指導を継続して欲しい。一方で、「友達に優しくされていない」と感じている児童が「割にかかいることから、そうした児童に対してはしっかりと個別に関わっていただきたい。また、どうすれば学校が楽しくなるのかを児童に尋ねることも大切ではないか。児童の思いを聞き取ってほしい。きりりカードについては、高学年につれて書かなくなるという実態を子どもから聞いたことがある。特に、高学年の児童には、心のこもった言葉や文字を用いて、相手へ思いや褒めることを行う意義を伝える場を設けてほしい。互いに思いやりのある言葉を掛け合うことは、自己肯定感の向上につながると思う。こういった関係性は大人になっても大切なので、互いに行えるように促してほしい。このように、学校での取組みで構築された思いやりの心は大人になっても大切なことであり、その気持ちがあれば優しくなる。心が豊かになるので、学校ではその一歩を担っているということを再度、認識して欲しい。また、改善策の「職員からのカード」の取組みは、大人から認められているということにつながる。上記の思いやりのこころを構築する基礎になると思うのは是非、今まで以上に意識をして行ってほしい。
		・学校は児童の人権意識向上に関わる取組をしているという回答が80%以上である。 (保護者アンケート)	保護者:83.6%	B	・言葉遣いを見直す学級活動や、人権週間中の取組などの様子や児童の課題を、学校便りや学年便り等で保護者に向けて発信する。	保護者:82.6%	B	アンケート後に人権週間中の取組を発信する学年便りが配付されたのが残念だった。懇談等でも学級の実態や取組を伝えていく。	基準は概ね達成されており、さらなる改善点が検討されてることから自己評価は妥当である。人権意識を高める取組みや人間関係に対する児童への指導は十分にできていると思うので、引き続き継続してほしい。保護者の理解は得られつつあると思うが、学校での取組みを正しく掴み取れていない部分もあるので、教職員から保護者への発信を今後も引き続き行ってほしい。特に、学校の様子は学校便り等から判断できるものが多い中で、その取組みを発信する学校だよりの配布の時期についても確認する必要がある。学校の各取組みを単発に行うのではなく、学校全体を通した取組みとして学校全体で意識することが重要である。これは行事や教育活動の年間指導計画の意識だけでなく、それらを保護者や地域に伝える時期等も含めて学校全体の流れの中で検討する必要がある。
	②すきだ山手小学校運動を通して、礼儀正しい児童を育成する。	・挨拶がよくできるという回答が児童85%以上、保護者75%以上である。 (児童・保護者アンケート) ・履き物をそろえるという回答が児童88%以上、保護者55%以上である。 (児童・保護者アンケート)	挨拶 児童:88.3% 保護者:71.7% 履き物 児童:89.1% 保護者:60.4%	B	・挨拶や履き物揃えの週目標に併せて、児童に地域や家庭で取り組むためのめあてを考えさせ、「がんばりカード」で保護者と共に確認する。 ・職員からもきりりカードを積極的に渡し、具体的ながんばりを紹介しながら児童の意識を高めていく。	挨拶 児童:84.2% 保護者:70.6% 履き物 児童:88.2% 保護者:51.5%	B	・地域や集合場所で挨拶ができていないことを、児童が自覚してきたように思われる。できている児童は認められる機会が多い。寒くなるとよけいに挨拶ができなくなるので、こまめに振り返り励ましていく必要がある。 ・履き物揃えの「がんばりカード」で家庭の意識が一時的に上がった。しかし、児童の実態が明らかになった分、保護者の評価が下がったのではないかとと思われる。取組を行う際に職員の声掛けを手厚くしていく。	「すきだ山手小学校」については、あいさつ、返事、履物、掃除等、生活習慣や人間関係に関する重要な事項が盛り込まれており、概ね基準が達成されていることから、自己評価は妥当である。あいさつについて、150周年記念式典時に「あいさつを言わされている感があるので、気持ちが乗らない」という意見が児童からでていた。いまいちど、あいさつの必要性・重要性を児童に伝えていただきたい。また、学外で気持ちよくあいさつができる関係性の構築が難しい場合もある。「山手の子」には、学校以外でも一生気持ちよくあいさつができる関係性の構築、そういったことの大切さを伝えていただきたい。家庭環境によっては、家庭内でのあいさつの機会が少ない児童もいると思うが、あいさつの意義・素晴らしさについての指導を引き続きお願いしたい。あいさつのもたらす効果について認識してもらい、「いつでも・どこでも・だれとでも」あいさつができるようになってもらいたい。あいさつ、履物、返事等が児童・保護者・教職員の全員ができることによって、誰もが心地よい関係性になることを願う。
(二確かな 学びの 力 の 育 成)	③授業改善を図り、基礎学力の定着と、適切に表現できる児童の育成を目指す。	・「授業で学んだことがよく分かる」という回答が85%以上である。 (児童アンケート) ・「お子さんは、学校での学習内容を理解している」という回答が80%以上である。 (保護者アンケート) ・「国語科・算数科の単元テストにおいて、正答率が80%以上である」という回答が88%以上である。 (教職員アンケート)	児童:91.7% 保護者:85.3% 教職員:90%	A	・「岡山型学習指導のスタンダード」を全職員が再確認するとともに、相互授業参観等を通して、今後も授業改善を行っていく。 ・授業の中で、「何ができればよいのか」という着地点を明確に示すことで、学習の見通しをもてるようにしていく。 ・毎時間、振り返りの時間を確保したり、振り返りの仕方を工夫したりすることで、自分の学びに気付くことができるようにする。	児童:91.9% 保護者:84.0% 教職員:81.3%	B	・児童の達成状況が90%を超えていることから、「岡山型学習指導のスタンダード」の徹底や、授業の中で学習課題をしっかりおさえていること、学習の見通しをもたせることが効果的であったと考える。3学期は学年をこえた相互授業参観を実施することで、教職員のスキルアップを図ってきたい。 ・一方、国語科・算数科の単元テストのクラス平均が80%以上の達成率が1学期に比べて下がっていることから、3学期は基礎基本の徹底や応用問題をより多く取り組むことが必要に思う。	基礎学力の定着をしており効果を挙げているので自己評価は妥当である。基礎学力の向上が図られていることは教職員の努力の賜物である。今後も個々の児童のニーズを意識して、児童理解に基づいた授業計画・実践・改善を行ってほしい。「岡山型学習指導のスタンダード」の徹底や学習課題を理解させ学習の見通しをもった授業の構築は今後も必要である。また、同時に子どもの実態や状況に応じて柔軟な対応を行う授業構築にもつとめてもらいたい。子どもにとって、学ぶ意義や自身の学びを真に振り返ることは何かを教員同士で話し合うことで教職員のスキルアップをはかっていただきたい。
		・「自分の考えや思いを分かりやすく話したり、書いたりできるようにってきている」という回答が80%以上である。 (児童・教職員アンケート) ・お子さんは、「自分の考えや思いを、進んで話そうとしている」という回答が80%以上である。(保護者アンケート)	児童:82.9% 教職員:85.7% 保護者:79.3%	B	・まず、自分の考えをしっかりとるような手立てを充実させ、ペアワークやグループ学習等をより効果的な場面で行うことで、聞く力を育てるとともに、表現したいという気持ちを高めるようにする。 ・山手っ子タイムや国語科の授業等を通して、自分の考えや思いを適切に表現できる取組を行うことで、表現する力の向上を図る。	児童:85.6% 教職員:95.7% 保護者:77.6%	B	・自分の考えをもつ時間を充分にとり、ペアワークやグループ学習を効果的に活用したことで、児童・教職員ともに改善が見られた。今後も引き続き児童が表現したいという気持ちがもてるような授業展開を継続していく。 ・山手っ子タイムの内容も各学年で精査したことで、効果が出たと考える。今後も、児童の実態にあった取り組みにしてい。また、校内研修などで他の先生方の良かった取り組みなどを紹介し合うことで、自分の授業改善にもつなげていきたい。	児童の表現する力が向上しているので自己評価は妥当である。自分の考えや思いを話す、書くことは、今後の学びの基礎にもなる。自身の考えを表現する際には、考えをまとめ、適切な言葉を選び、そのことが聞き手や読み手にどのように伝わるのかという複数の視点が必要となる。表現したいと児童が思える環境づくりを行っていることは素晴らしい。特に、ペアワークやグループ学習にも工夫や努力が見られる。山手っ子タイムの内容も定着しており、また効果を挙げているので引き続きおこなってほしい。
	④ICTやユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりを意識する。	・「学校で進んでパソコンを使って学んでいる」という回答が90%以上である。 (児童アンケート) ・「一人一台パソコンを使って、児童の学んでいく姿勢を育てている」という回答が90%以上である。 (教職員アンケート) ・「視覚的支援、感覚を使った活動、半具体物の活用等ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業改善に取り組んだ」という回答が95%以上である。 (教職員アンケート)	児童:92.5% 教職員:92.9% 教職員:92.9%	B	・授業の中でどこでパソコンを利用すればより効果的か吟味し、実践することで、主体的な学びへとつなげるようにする。 ・定期的に情報担当による研修を行うことで、教員のスキルアップとともに、日々の実践に活用できるようにする。 ・家庭学習においても、タイピング等を課題として取り組ませることで、パソコン操作能力を高める。	児童:90.3% 教職員:91.6% 教職員:95.4%	A	・授業の中でよりよいパソコン利用を吟味し、実践したことで、主体的な学びへとつなげることができている。今後も引き続き継続していく。 ・定期的に情報担当による研修を行うことで、教員のスキルアップとともに、日々の実践に活用できるようにする。 ・家庭学習においても、タイピング等を課題として取り組ませたことで、パソコン操作能力を高め、普段の学習時間での活用にも生かすことができている。一方で、家庭でパソコンが使えることで、使い過ぎなど新たな問題も発生しているため、今後も使い方の徹底を図っていく必要がある。	1人1台端末を用いて児童の学ぶ姿勢を育て、視覚的にもユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業を実施していることから、自己評価は妥当である。今後も、日々の授業を積み重ね、ICTを用いた授業展開を工夫してほしい。パソコンの使い方を学ぶのは大変有意義であることの反面、インターネットの誤った使い方、情報モラルの点で心配があるので、学校でも今まで以上に指導をお願いしたい。授業において、パソコンを用いる場面とそうでない場面をうまく使い分けている場合とそうでない場合が見受けられた。何が効果的なのかということを学校全体で研修を行ったり、良い事例の共有などをおこなってほしい。
	⑤家庭学習の定着と、児童の発達段階に応じた取り組みをしていく。	・「平日に、家庭学習で(10×学年+10分)以上に取り組んでいる」という回答が、保護者75%、児童80%以上である。 (児童・保護者・教職員アンケート)	児童:85.5% 保護者:69.5% 教職員:100%	B	・週末課題等で、新聞の記事を読む活動や学力向上を図るプリント、タブレットドリル等に取り組ませる。 ・自主勉強の内容の充実を図るために、よいものを掲示したり、メディアコントロール週間に合わせて、「自主勉強大会」等を行ったりする。 ・高学年においては、教科書を使った準備学習の取り組みを推奨することで、課題意識をもって授業に参加できるようにする。	児童:85.6% 保護者:64.0% 教職員:83.3%	B	・新聞の記事を読むことやタブレットドリル等の週末課題に取り組ませたり、メディアコントロール週間に合わせて、「自主勉強大会」等を行ったりすることで、一定の効果が見られた。 ・高学年においては、教科書を使った準備学習の取り組みを推奨することで、課題意識をもって授業に参加できるようにってきている。しかし、単調な自主勉強になっている児童もいるので、これからも続けて推奨することで、中学校の学習へスムーズに移行できるようにしていきたい。	家庭学習の取組みについては児童が行えていると認識しており、自己評価は妥当である。家庭学習の定着は、家庭環境や保護者の考え方により難しい場面もある。特に、自主勉強で何をやるのかが家庭によって考え方が異なるが、取組み事例や花丸ノートの紹介は、各児童にとって学びのヒントとなると期待する。児童と保護者の回答において大きな違いが見られるが、保護者に対してさらに学校側から家庭学習への協力を要請してもいいのではないかと。家庭学習の取り組みは、継続した子どもの学びにつながることで、学校と家庭が連携をして個々の子どもにあった「学ぶ」意義を検討してほしい。

様式【学校評価資料】

様式【学校評価資料】				R5年度				山手小学校	
学校経営目標	具体的計画	令和5年度の達成基準	自己評価(中間)			自己評価(最終)			学校関係者評価
			達成状況	評価	改善策	達成状況	評価	改善策	自己評価の適切さ
（体力づくりと元健康・プロジェクトの充実）	⑥休み時間や教科体育の時間にたくさん運動に取り組むことができるよう指導を工夫する。また、目標をもって運動に取り組むことができるような活動を積極的に行っていく。	・「業間休みに外へ出て体を動かしている」という回答が90％以上である。（児童アンケート） ・「体育の学習でたくさん運動している」という回答が95％以上である。（児童アンケート） ・「先生は児童が目標を持って運動に取り組むことができるよう工夫を行った。」という回答が95％以上である。（教職員アンケート）	児童:79% 児童:91.7% 教職員:90.9%	B	・運動委員会を中心に、新しい遊びの提案や、一緒に遊ぶ企画を月に1回程度行い、休み時間に楽しく外遊びができるようにする。 ・体育の授業において、めあてや振り返りをきちんと行うことで、児童が目標をもって運動に取り組めるようにする。また、ペース走カード等や「わたしたちの体育」を利用し、自分のがんばりが目に見えるようにする。 ・今後も引き続き、「いきいき岡山っ子☆運動習慣カード」やチャレンジランキングを活用していく。	児童:84.7% 児童:90.6% 教職員:88.9%	B	・運動委員会の企画は好評で、寒い時期であるが、楽しく外で体を動かして遊ぶ児童が増えている。一方、業間にも体調を理由に校内で過ごす児童もあり、状態を見ながら引き続き教員が声をかけていくことが必要と考える。 ・「登下校で歩く」「外で遊ぶ」なども運動として捉え、意識して体を動かすことができるよう声をかけていくようにする。また、体育の授業でのめあてや振り返りの時間を大切にすることを続けていく。 ・オリジナルビンゴカードを作成するなど、さらに気軽に楽しく体を動かすことに取り組めるような工夫を考えていきたい。	休み時間に運動委員会の企画を行う等、児童の運動量を確保しているので、自己評価は妥当である。成長期にある児童にとって運動は欠かせないものであり、体を動かす楽しさや運動との出会いを提供している教員の工夫は評価できる。体を動かして自分に合うスポーツを見つける、団体競技の仲間意識を持つと思いや、りにもつながると思うので、積極的に人との関わりをもった体を動かす機会は提供してほしい。 一方で、児童の中には、休み時間に「外に出て体を動かす」ことを行いたくない場合もある。改善策にもあるように、児童の体調に合わせて教員からの声かけを通して子どもの体力向上をはかっていただきたい。
	⑦メディアの利用について自分で判断できるようになるために、メディアコントロール週間を中心に、家庭と連携し、望ましい基本的生活習慣の定着を図る取組を行う。	・「メディアコントロール週間では、決めた自分のめあてを守ろうとしている」という回答が90％以上である。（児童アンケート） ・「メディアコントロール週間の前後に、取り組む内容について一緒に考えたり、声をかけたりしている。」という回答が80％以上である。（保護者アンケート） ・「担任の先生は、メディアコントロール週間に、メディア利用や睡眠時間について話題にしたり、児童がめあてを守れるように声掛けしたりしている。」という回答が100％である。（教職員アンケート）	児童:90.2% 保護者:76.3% 教職員:100%	B	・保健委員会作成のポスターは有効であったので、今後も活用していく。 ・メディアコントロール週間にめあてを達成するために工夫したことを保健日よりで家庭に知らせていく。 ・学校保健委員会の内容を保健日よりで各家庭に知らせ、メディアコントロールについて啓発を進める。 ・すこやかカードを前回のものと合わせて早めに配付し、家庭でめあてや取り組む内容を考えてもらう期間を設ける。	児童:87.9% 保護者:70.9% 教職員:100%	C	・タブレットの使用について保護者から多くの意見をもらっている。使用の仕方は学校独自で決められない部分もあるが、メディアコントロール週間中の使用については校内で検討する必要があると考える。 ・児童に対しては、ポスターやミニ保健指導だけでなく、週間中にお昼の放送をする等の工夫ができと思うので3学期にも取り組みたい。 ・保護者に対しては、タブレットをどのように使っているかを積極的に紹介したり、児童が学習した情報モラルの動画をHPにリンクを貼ったりなどして啓発することもできるのではないかと考える。 ・すこやかカードも長く同じものを使用しているので、内容を検討していくことも考えたい。	基本的生活習慣の定着に向けた取り組みが実施されているので、自己評価は妥当である。基本的生活習慣の定着には、家庭との連携が不可欠である。睡眠時間の減少という調査結果もあり、生活リズムを乱れないようにするために、メディアコントロールは必要である。 改善策に書かれているように、保護者に対しての啓発を積極的に行っていたきたい。家庭環境や親の考え方はさまざまで、寝る時間一つとっても同じ学年でも大きな差異があるのでメディアコントロールの取り組みは非常に重要であると感じている。一方で、「すこやかカード」については、改善策でもあげられていたが、適当な〇つけが習慣化して意識が薄れている場合もあるので、内容の少しリニューアルを保護者として要望したい。 これらのことは、家庭間でも差が大きいことから、目標設定通りとならないこともあり、保護者の意識改善が必要である。規則正しい生活習慣の効果についての指導をしてほしい。
四（開かれた地域連携プロジェクト）	⑧各種通信やホームページ等を通して、学校行事の様子や児童の姿、子育てに役立つ情報を発信し、本校の教育活動を多くの人に知らせる。	・「ホームページや学校便り、学年だより等の各種通信により、学校から発信した情報が役に立った」という回答が、93％以上である。（保護者アンケート） ・「連絡帳・電話連絡・学年便り・ホームページ等の各種通信により、保護者との連絡を密に取ったり、役立つ情報を発信したりできた」という回答が93％以上である。（教員アンケート）	保護者93.4% 教員100%	A	・今後も各種通信により、学校での教育活動の様子や役立つ情報等、定期的に発信していく。 ・日々の電話や連絡帳での連絡は、これからも各担任が行っていく。学年便りやホームページ等の内容は、社会の状況を考慮しながら、より役立つものへとしていきたい。	教職員:100% 保護者:94.4%	A	・各種通信は、発信する側と受け取る側、双方のメリットを考えて、定期的に行ったり、内容を検討したりしていく。 ・学校での児童の様子が伝わりにくいという文章表記でのご意見もあったので、写真等を利用することにより、目的に応じた通信になるように工夫していきたい。 ・下校時刻をホームページに復活させてほしいのご意見が2件あった。校内で協議したい。必要と認められる方には、個配をしている。また、学校には予備を常備し、いつでも届けられるように準備している。	各種通信やホームページでの発信は安定的に行っていることから自己評価は妥当である。「お知らせ」によって学校の様子が保護者に伝わり、学校への信頼関係を構築できている。一方で、情報の発信には情報セキュリティの観点からの精査は必要である。 例えば、改善策の「下校時刻のホームページの復活等の要望」については、子どもの安全を一番に方法を考えていただきたい。 情報発信は、学校と家庭・地域の相互理解を深め、欠かせないものになっている。きめ細やかな発信で保護者も学校の状況を理解できるようになっている。ホームページで情報発信する内容と各種通信（紙面）で発信する内容と分けてもよいのではないか。
	⑨学校・家庭・地域で連携して、児童の健やかな成長を目指すために、ボランティアによる学習支援の機会を工夫し、交流を深める。	・「学習効果や地域交流を意識して、学校支援ボランティアや保護者ボランティアの有効な活用に務めた」という回答が90％以上である。（教員アンケート） ・「地域のボランティアの方が学習支援してくださることは、児童のために役立っていると思う」という回答が93％以上である。（保護者アンケート） ・「ボランティアの方と一緒に学習することは楽しいと思う」という回答が90％以上である。（児童アンケート）	教職員92.8% 保護者96.2% 児童89.9%	A	・今後も、地域ボランティアと保護者ボランティアの特性を考慮して、教育活動に積極的に取り入れていきたい。 ・地域ボランティアの活用がまだ少ないので、少人数での学習支援を念頭に活用を図っていく。 ・引き続き、ボランティア活動の予告を放送で行ったり、記録を児童の目に触れる場所に掲示したりして、学校と地域がつながっていることを実感できるようにしていく。	教職員:95.6% 保護者:95.9% 児童:92.5%	A	・ボランティアの活用が活発に行われるようになった。地域ボランティアには、2年生が行った町探検の引率をお願いした。保護者ボランティアには、5年生が行ったエプロン制作の支援をお願いした。他にも、4年生の版画支援、毎週水曜日の読み聞かせなど、多くのボランティアに活動いただいた。他にも、毎週始めのあいさつ運動や登下校安全見守りなど、多くの方にご支援いただいている。 ・地域の方が教育活動に参加してくださっていることを、より多くの方に知ってもらう広報が追いついていないことが気になっている。職員全体でも共通理解のもと、開かれた学校になっていくように今後も手立てを考えていきたい。	これまで行ってきたことに対する自己評価は妥当である。学校からの「困り感」等を保護者や地域により積極的に共有してほしい。地域のボランティアによる支援が充実しているということは、「開かれた学校」としての取り組みにもなるので、ぜひその活動について広報をしてほしい。 また、学年別の下校の際には、地域による協力に差がある。地域や保護者の協力を積極的に仰いでほしい。できる範囲で地域の子どもを大人全体で支え、そのことを子どもに伝えることで、地域の人々に守られている安心感を教えることができることを期待している。 最後に、学校における教育課題を的確に捉え前向きに取り組んでいる教職員の姿勢は評価に値し、家庭や地域からの教職員への信頼は増している。学校が困難な課題を抱えている場合は地域や保護者の協力をあおぎ、教職員の負担が少しでも減るように、学校の無理のない範囲で効率化してもいいのではないだろうか。

※下線部・・・「いじめ防止基本方針に基づく取組」に関連する項目